ひと まち

中学校に赤ちゃんがきた！

中学生が乳幼児とふれあい、命の大切さを学ぶ「子育て体験授業」が、12か所の中学校で行われました。昨年度から始まったこの授業。中学生は乳幼児とふれあうことで、何を学んだのでしょうか。

赤ちゃんを前に、少しおっかなびっくりの生徒たち。お母さんが生徒にゆっくり手渡し、赤ちゃんを抱っこできるようにします。「思っていたより重い」と多くの生徒が口にします。エコーや生まれたときの写真を見せたり、離乳食を食べさせるのを手伝ってもらったり、みんなでオムツ替えをしたりと、親は趣向を凝らし生徒が赤ちゃんに慣れるように工夫します。それでも怖くて赤ちゃんに触れない生徒もいました。「怖くて触れない」というのは大事な感情です。大切だと思うから、触れるのが怖いという感情が生まれる。そういうときは無理をせず、できる範囲でふれあいをします」と話すのは、NPO法人川越子育てネットワーク代表理事・若杉由美子さん。「中学生は多感な時期。自分では何もすることができない乳幼児を親が愛情を持って育てる様子を見て、自分も大切に育ててもらったんだ、命ってかけがえのないものなんだと感じ、自分や他の人の命を大切なものと思ってもらえたら」と話します。

少子化や核家族化の影響で、赤ちゃんに触れたことがないまま親になる人も少なくない現代。中高生に、命がどんどんつながって今の命があるということや、親になるということはどんなことなのかを伝えたいと考えていた同ネットワーク。市の子育てプランに、中学生への子育て体験学習計画があることを知り、市との協働事業として手を挙げました。

参加した生徒からは、「命をつないでいくことはすごいことなんだと感じました」「育ててくれた親に感謝したい」と感想が。小さな命の重さを感じた瞬間です。

参加したお母さんからは、「子育ての素晴らしさを感じてくれてうれしかった」「子育ての話をして、自分も子どもを産んでよかったと改めて実感しました」。今回の授業を通して、親も命の大切さを再認識した様子でした。

赤ちゃんとふれあい体験の時間
抱っこをしたり本を読んだりおもちゃで遊んだり、いろいろな方法で赤ちゃんとふれあいます。

お母さんだけでなく、お父さんも参加。
中学生と一緒に、市長もふれあい体験をしました。

妊婦体験の時間
4リットルの水の入ったビニール袋に生の卵を入れ、体の前で担ぎます。卵が割れないように立ったり座ったり階段の上り下りをしたり、貴重な妊婦体験です。

「重い！」「立ち上がれない～」の声が、あちこちから聞こえます

卵が割れていないことを確認し「良かった！」と喜びの声

誕生学®講座の時間
誕生学®アドバイザーが、赤ちゃんがおなかの中で成長し、産まれてくるまでの生命力などを説明します。

国指定重要無形民俗文化財
川越氷川祭の山車行事

川越まつり

2日間で延べ約77万の人でにぎわいました

春に修理の終わった本丸御殿の前で曳っかわせ

まつりのひとコマ

昔ながらの風習が残る伊佐沼では、まつりの前日、木を組んでのぼりを立てます

山車は、会所の前を通るとき、
会所に山車を向けて挨拶の囃子をします

前庭を造る会所もあります。まつりの中心本部ともなり、来客をもてなしたりします

氷川神社にお参りをする山車

ひとまち ふおとニュース

大きいサツマイモ掘れたー！

10月22日、農業ふれあいセンター近くの畑で「さつまいも掘り取り体験」が行われました。当日はあいにく小雨混じりの空模様。しかし、スコップを手に奮闘する子どもなど、多くの参加者でにぎわいました。親子で参加した大木司（おおきつかさ）くん（6歳・並木、下写真左）は、「イモ堀りは2回目です。前より大きいのが取れてうれしかったです」。取れたサツマイモを受け取ったお母さんも、「大学イモにしようかな、スイートポテトにしようかな」と、うれしそうな様子でした。

切り絵の世界へ

川越の民話「山内禁鈴」がモチーフの作品

世界的に有名なスウェーデンの切り絵作家、アグネータ・フロックさんの展覧会が、10月23日～28日、茶陶苑（仲町）で開催されました。3年前に川越に来たことがきっかけで、民話や風景写真などをもとに、川越にちなんだ作品も数多く作成。作品は水面や動植物などの細かい描写、多彩な色使いで、とても1枚の紙からできているとは思えないものばかりです。「川越は、蔵の建物や母国にはない草花があってとても印象的なまちです」と、アグネータさんは話してくれました。

会場で出身地ヴェステロースの名産キュウリと川越の名産サツマイモが手をつないでいる作品を説明するアグネータさん